

教育長室だより

第 26 号

2021.6.7

今年はこれまでにない早い時期の梅雨入りとなり、長くなるであろう梅雨の真最中です。コロナ感染の状況は県内では収まる気配となっていますが、次々と変異ウィルスの誕生と国内感染が報告され、まだまだ安心はできないようです。が、対策の方もだんだんと習慣化され、感染が下火のうちにワクチン接種が進んで、コロナ禍が終息することを心から願っています。

○

前回の25号で、新型コロナウイルスの子どもたちへの影響について、心理学者の言説を紹介しました。本年度は町内で一部陽性者が出ましたが、学校の先生方の懸命の感染防止の取り組みの結果、学校での感染の広がりは防ぐことができ、長期の休業は免れています。今のところ今年は学校の教育活動を、感染対策との兼ね合いの中で、できるだけ元の姿に近づけたいと考えています。

と同時に、今回のコロナ禍によって、社会生活に変容がもたらされたように学校教育も、これまでの活動についてじっくり見直すことができるチャンスになったようにも思います。

○

今回は「ポジティブな行動支援」SWPBS (School-wide Positive Behavior Support) の取り組みについて紹介します。簡単に言えば、子どもに対して否定的な言葉による指導よりもポジティブな態度で接することで、子どもたちに笑顔や自信を広げていくことを目指す学校全体の取り組みのことです。

○

子どもが自分に自信を持つということ。これは実は子どもの成長にとってとても重要なことです。走る速さをみんなに褒められた。描いた絵が表彰された。作文を先生に読んでもらった。様々な要素が自信となっていきます。しかし、そういう人よりぬきんでている成果を上げることはそうそうできるものではありません。でも、勉強や体育や音楽、図工などで褒められた自信は、ときにプレッシャーともなります。そして期待されるほどにうまくできなかつたときに、ひどく落ち込むということもありがちです。

それで、最も好都合なのは“根拠のない自信”を持つことです。とりたてて理由はないけれど何だか不安のかけらもなく明るく元気に過ごしている子がいます。何かしらないけど“大丈夫だろう”と考える子です。根拠のない自信は失われることがまずありませんから自信を失って落ち込むこともありません。

○

どうすればそんな前向きな、考えようによっては脳天気な性格ができあがるのでしょうか。

○

多くの児童心理学者や、カウンセラーが異口同音に言うには、愛され、信頼されて育った経験、自分は必要とされる存在であることを刷り込まれている子どもがそうなるということです。周囲の大人に対する信頼と安心感がそれを支えます。

○

子どもの不安は、周りの大人の不安の裏返しでもあります。前向きに意欲的にくらしている大人に囲まれていると子どもは安心します。

昔、あるカウンセラーは講演会でこう言い放ちました。「親は子どもの心配をするな！」と…。昔の記憶なのでその前後の話は覚えていません。

○

そうはいつでもふつう大人は、特に親は子どもの心配をするものではないか。いつも子どもの心配をしているのが親というものじゃないかとも思います。

そのカウンセラーはたぶん今まで関わってきた相談などの際に親が不安のあまり、さまざまな否定的な言葉や不安を直接子どもにぶつける姿を見てきたのではないのでしょうか。その結果、子どもは自分に自信を持たず、自分を否定的に見るようになっていく。そして様々な問題を抱え込むようになる…。そんな想像をします。

○

今回、町内の学校で取り組もうとしている“ポジティブな行動支援は”「子どもを肯定的な眼で見えていく。否定する前に肯定できる点を取り上げる見方をする。」ということを中心に取り組みます。

学校も従来、問題があれば 厳しく注意することを中心に指導してきました。悪いことは悪いという指導は今後も続けなければなりません、評価できる点をしっかり見つけて褒める活動を意識していくということになります。

○

“ポジティブな行動支援”は子どもを取り巻く大人の例の意識を変えること、つまり子どもを見る眼の変容がもともになるものです。

すでに取り組んでいる学校を見ていると、まず学校ごとに“望ましい行動”の内容を決めます。一つでない学校もあります。あいさつを広げようとする学校、しっかり人の話を聞くことを目標にする学校、掃除をがんばる学校、学習への取り組みが素早いことを目指す学校、授業開始までに授業準備が整っていることを目指す学校など様々な取り組みが行われています。

○

例を見ると、何だか昔からずっと注意されてきたようなことばかりにも見えます。大事なものは“言われてやる”のではなく自分たちで取り組んで、それを子どもたちが互いに褒め合ったり、教師が認めたりすることで子どもたちに自身を持たせようとする点です。

やりながら子どもたちが自分と自分たちに自信を持つことができたらいいなあと思っています。